ＩＳＳＮ　1349-0931

上方文藝研究

第６号

忍頂寺文庫蔵〔逸題加賀掾段物集〕について―段物集研究の試みとして― … 川端咲子　（1）

『御伽厚化粧』と『世説故事苑』 …… 神明あさ子　(13)

地蔵寺蔵『観音新験録』―翻刻と解題 …… 山崎　淳　(21)

名所「待兼山」の成立―和歌と伝承の近世的受容をめぐって― …… 廣川和花　(44)
鳴海邦匡

石塚寂翁の家集について …… 神作研一　(58)

難蔵山集　翻刻と解題 …… 浅田　徹　(70)

連載　上方文藝研究の現在（６）　京都近世小説研究会 …… (93)

上方文藝研究の会

名所「待兼山」の成立

―和歌と伝承の近世的受容をめぐって―

廣川和花
鳴海邦匡

はじめに

大阪府北部の豊中市・池田市・箕面市の境界に位置する待兼山（標高七七・三メートル）は、名所として名高い。それは後に記すように、一〇世紀末頃に成立したとされる『枕草子』に列記されたことを契機として、平安中期以降、歌枕の地（歌名所）としてよく知られるようになったからである。一八世紀末に成立した『摂津名所図会』（注1）にも、待兼山の麓の恋人の元へ通う男がその恋人とともに川に身を投げる心中譚として、その名が詠み込まれた和歌と図絵とともに大きく取りあげられており、待兼山の名をより一層知らしめたとされる。

『摂津名所図会』が成立した当時の待兼山は、周辺の農村が入会で利用する小物成山として存在していた（注2）（図一（口絵）、図二参照）。小物成年貢地の「西山」として検地帳にも登録されている待兼山は、日常的に肥料や燃料などを採取する場として利用されており、植生景観は矮小なアカマツを中心とした松林あるいは草地であったと考えられる。実際の待兼山は、優れた景勝の地ではなかったといえそうである。

近年関心を集めている由緒や伝統の創出の問題、史蹟論などと関わって、歴史学系の研究においては近世の名所図会、案内記、地誌類の再評価が試みられている。そこでは名所図会等の編纂を通じて伝承や伝説が整理され、新たな名所が創出されていったことが指摘されている（注3）。文学系の研究においては、和歌研究に「地方」の視点を取り入れることが提唱され（注4）、「物語」や和歌が地域における説話・伝承のなかで変容してゆく過程が論じられている（注5）。ただし、ここでは「史実」あるいは名高い文芸作品と地域の素朴な「伝承」を切り分けて取り扱ってきた旧来の研究に対する批判に重きが置かれており、各史料のもつ個別の性格の歴史的位置づけが曖昧になりがちである。また、伝説の地域的変容と定着の問題を扱う文学研究の多くが、個々の著名な人物にまつわる物語、あるいは語り手を主題としたものであり、地域や名所を分析の素材とするものは少ないように思われる（注6）。

こうしてみると、個々の事例を素材とした検証には、個別事例の蓄積においても、方法論においても、未だ多くの課題が残されているのではないか。待兼山は、歌名所、悲恋の地、入会山など、様々な姿を見せながら歴史的に存在してきた。これらの事象がどのように繋がっているのか、この点についていくらかでも考えてみることが本稿の目的である。以下では、平安中期以降に歌名所として成立した待兼山の変容を、近世の出版物を中心に整理するとともに、その画期は何であったのかについて考えてみたい。

一　歌名所としての待兼山・玉坂山

山は　おぐら山。かせ山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。わすれずの山。すゑの松山。かたさり山こそ、いかならんとをかしけれ。いつはた山。かへる山。のちせの山。あさくら山、よそに見るぞおかしき。おほひれ山もをかし。臨時の祭の舞人などのおもひ出らるゝなるべし。三輪の山おかし。たむけ山。まちかね山。たまさか山。みみなし山。

（『枕草子』（注7）　下線・記号は筆者による。以下同様）

ここに挙げた『枕草子』（一〇〇〇年頃）「山は」の段に待兼山の名が見えることはよく知られている。『枕草子』以前、三代集にも『万葉集』にも待兼山の名は現れず、ひろく認知された歌枕の地名ではなかった。それは、「山は」の段に挙げられた山の名が、古歌に歌われてきた名山ではなく、新しい歌枕となりうるような興味を引く山の名を提示する意欲を示すものであったからと指摘されている（注8）。

『枕草子』以降、待兼山と玉坂山が次第に歌枕としての地位を獲得してゆく過程は別表に示すとおりである。

待兼山については、高陽院七番歌合（一〇九四年）で「郭公（ほととぎす）」の題で詠まれた二首（周防内侍「夜をかさねまちかね山の時鳥雲井のよそに一声ぞきく」・藤原顕綱「明くるまで待ちかね山の時鳥けふもきかでやくれんとすらむ」）がそれぞれ『新古今集』と『新後拾遺集』に収録され、「ほととぎす」との結びつきが権威ある認知をうけた。また『堀河百首』（一一〇五年）の俊頼「よもすがらまちかね山に啼く鹿はおぼろげにやは声を立つらん」・のちに詞花集に採録された太皇太后宮肥後「こぬ人をまちかね山のよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞきく」などにより、妻恋の鹿・「呼子鳥」も加わった。下って最後の勅撰集『新続古今集』（一四三九年）に採録された藤原成通「たのめつつ君がこぬ夜の衣手やまちかね山のしづくなるらん」では、鹿もほととぎすもなく歌枕として自立したと評価されている（注9）。

一方、「まちかね山」に続いて「たまさか山」の名が挙げられていることは、これまであまり注目されてこなかった。しかし、以降で述べる悲恋の地としての待兼山のイメージの形成には、「玉坂山」の存在が関わっていると考えられる。玉坂の名が歌に結びつけられて最初に現れるのは、陽成天皇の皇子元良親王（八九〇―九四三）の死後しばらくして編纂されたとされる私撰集『元良親

王集』(注10)である(表参照)。ここでは浮気な親王に愛情を求める女の歌として「たまさか」に歌枕的な意味合いが付与されており、この歌は後に鎌倉中期の私撰集『万代集』にも収録されることとなった。

つのくにに、たまさかといふところに、しりおき給へる女「てしまなるなをたまさかのたまさかにおもひいでてもあはれといはなん」

このように、高貴な身分の男が玉坂の女の元へ通うようになるが、途絶えがちなその来訪を女が嘆くという逸話が紹介されている。この悲恋話は、待兼山の悲恋のイメージを形成する原型として注目される。また、平安中期の私家集『忠見集』(注11)においても、玉坂にいる昔の恋人の元へゆく逸話が紹介されており、玉坂という地名の別離のイメージが踏襲されている。玉坂山は、勅撰集にはその名は登場しないものの、もっぱらほととぎすとの結合において歌枕として用いられている。

それでは何故、都から離れたこれら二山の名が和歌に詠まれることになったのであろうか。ひとつの理由として、豊島北部の地が、貴族にとって景勝を愛でる場所として山荘・別業を設け、隠居や避暑のために訪れる場所であった(注12)ことが考えられる。待兼山、玉坂山(邂逅山)、後にあげる待難山の名の由来は明らかでないが、待ちかねる、偶さか、邂逅、待ち難しという、言葉遊びのような地名は、都から離れた地の寂しさを印象付けるものである。これらの地名は何らかの形で中央に伝えられ、歌名所として継承されていくこととなったと考えられる。

例えば、一四世紀前半の『源平盛衰記』(注13)巻三六には、歌人として評価された平忠度が、一の谷の合戦の前に摂津国名所の「玉坂山、有馬山、待兼山」を巡ったという記述があり、待兼山とともに玉坂山が摂津国に位置する歌名所であるという認識が広く定着していたことを示している。付け加えるならば、忠度はこの後一ノ谷の合戦で討ち死にしており、これらの地名が忠度の死をイメージさせたというのは考えすぎであろうか。ともかく、ここまでの段階では待兼山は悲恋の地ではないし、『摂津名所図会』のような心中譚も登場しない。

二　名所案内記の中の待兼山

一七世紀中頃から、名所案内記や地図などによる地理的知識の流通がはじまり、大坂の出版文化は興隆を誇ることとなる。大坂の名所案内記は、延宝期(一六七三-八一)から元禄期(一六八八-一七〇四)に刊行のピークがあり、その後空白期間を経て寛政八、一〇年(一七九六、九八)に『摂津名所図会』が刊行された(注14)。その過程で、和歌などの貴族文化を反映した名所観に、庶民のレジャーとしての要素が加わり、消費される情報へと変化してゆく。

さて、名所案内記に示される名所は、「歌名所」と「俗名所」にしばしば分けられる。歌名所は歌枕に認定された地に対応し、一方、俗名所は「所伝」など歌以外の由来がある場所であるが、その場所が不明であっても『日本書紀』などの由来があれば俗名所として認定されており、その基準は曖昧である(注15)。ともかく、こうした状況のもと各地域に伝わる伝説や伝承が盛んに考証されていくこととなり(注16)、待兼山や玉坂山についてもその事象が

次第に整理されてゆく。待兼山の場合、元禄九年(一六九六)刊行の『難波丸』(注17)がその原型をつくったといえる。「豊島郡神社仏閣名所」の項に以下の記述がある。

■待兼山　待心によせて読り　時鳥　呼子鳥　鹿　峯の椎柴
山川　等景物
古今恋二　大納言成道　頼めつつ君がこぬ夜の衣手に待兼山の雫成らん
待兼山は玉坂村の東なり
◎待難山　右山の続き方角同じ
或伝に云昔は此山無名の山なり永和の比或人世をいとひて当山に入いまだ勢形(ありさま)をかへざるにや其容(かたち)すぐれて艶なり或日玉坂の里にくだりけるに此里の何がしの独娘見て恋慕し程なくむつまじき中と成夜毎に山より里にかよふある夜待宵の時うつりてやうやう明がたちかく音信けるにかの女いらへもなく待ちくれてうつつに見えし面影の夢もつれなき山風の音と側なる障子に書付て絹引かづき打恨みたる粧(よそほ)い猶忘れがたく人目の関も恥ざりければ世の人のさがとなりて免さざりけるを恨み二人共麓なる川に行身を没(なげ)て消失ぬそれより待難面(まちつれなき)山と云心を下略して待難(まちつれ)山と云麓の川を待難川と名づくと也　但し一説には歌の名所に出る待兼山の異名共云
永和は後円融院の年号也今にいたりて三百廿年なり歌の名所となる事いまだ世ちかし然共右の物語に付て山の名と成事なをざりならず哀れなるためしなり又待兼といひ待難と云も共にいくばくならず待兼を後に待難といひならはせるもなかす(ママ)名所の故事かやうの類多し
◇待兼川　瀬川町のにしに有
(中略)
玉坂の池　同山(引用者注:佐伯山)景物有　玉吟　家隆
春風に今ハ氷も玉さかの池の面ハさざ波ぞ立
□玉坂山　玉坂の池並に歌右に出す
邂逅なる心　云かけて読り　景物時鳥　鈴虫

最初に指摘しておきたいことは、『難波丸』の記述が位置の問題に関心を示しているということである。先にみた『枕草子』以降の待兼山や玉坂山を改めてみてみると、摂津国にあるという程度の大凡の位置を示し、現実にどこに位置しているのかという情報までは求めていないことが分かる。ところが『難波丸』では「待兼山は玉坂村の東なり」などと記されているように、その正確な場所を求めようとする変化が示される。そうして待兼山と玉坂村、待兼山と待難山の位置関係を比定している。ちなみに、玉坂山については玉坂村とは関係のない「佐伯山(のちに五月山の異名とされる)」にあると記されているように、こうした比定をめぐる解釈の相違は近代以降も継続してみられる現象である(注18)。こうした変化は、貝原益軒や松下見林らにみられるような学問における現地調査主義の導入、考証学としての現地比定への関心の高まり、また、そうした成果が出版により広められるという、一七世紀後半以降の出版文化の動向と軌を一にするものであった(注19)。

もうひとつ気付かされるのは「待難山」という地名が現れてくることである。この山については待兼山の続きにあるとも、待兼山の異名とも伝えているが、その山をめぐる逸話として永和（一三七五-七八）の頃の心中譚を紹介していることは注目される。その内容は、山に隠遁する美男が玉坂の娘の許に夜ごと通っていたが、やがて衆人の知るところとなったのを厭い川に身を投げて心中するというものであり、娘が男を待ちわびて詠んだ和歌に由来して「待難（まちつれ）山」と、さらに身投げした川については「待難川」と名付けたというのである。ここにおいて心中譚が、待難山との関わりのなかで突如登場してくることとなる。その典拠は定かではなく、何故永和の頃の話なのかは分からないが、それでもこの逸話が『難波丸』において創作されたものであるとは考え難い。ただし、一〇世紀頃の逸話として先に紹介した、高貴な男と玉坂の地の女の悲恋の話は、内容が重なっており、心中譚の原型のひとつであったことは想像に難くない。

次に、摂津国出身の岡田徑志による元禄一四年（一七〇一）の『摂陽群談』(注20)から待兼山の記述内容をみてみることとする。

巻第三「山の部　歌名所」より

□邂逅山　同郡（島上郡）成合村の東にあり。（歌は略す）

（中略）

■待兼山　同郡（豊嶋郡）玉坂村の東にあり。（歌は略す）

「俗名所」より、

◎待難（マチヅレ）山　同郡（豊島郡）玉坂村の東、歌名所待兼山の続にあり。

所伝云、昔は無名の山也。永和の頃、或人世を遁て、此山に入れり。其形容世に勝て、在五中将にひとし、或日玉坂の郷に下る。此里の何某、独の娘あり。恋慕して程なく睦しき中となる。夜毎に山より郷に通ふ。或夜待宵の時移り、明方近く音信れば、彼女答もなく、

「待暮て現に見へし面影の夢も難面（つれなき）山風の音」

と読る歌に、猶も互の思深く、人目の関も不耻成行て、世の人の論となりぬ、二人とも世を恨て、終に麓の川に身を沈て、名のみ山川に残せり。

ここでもやはり待兼山や邂逅山（ここでは現高槻市に措定）、待難山がどこに位置しているのかという情報が問われている。そして待兼山や邂逅山が歌名所であるとされているのに対し、待難山は俗名所と評価されている。待難山については、『難波丸』に続き永和の逸話を掲載しており、この永和の話に由来する名所であることから、その歴史が三〇〇有余年程度の謂われしかなく、歌枕として認定するには足りないという評価であるようだ。

とはいえ、こうして『難波丸』や『摂陽群談』に紹介された待難山の心中譚は、この時期の大坂の世相を大きく反映したものであったといえる。さしたる決定的な理由もない男女がおこなう、互いへの愛情を確認するための心中は、きわめて近世的な文化現象であったからである。このような男女の心中のはじまりは、天和三年（一六八三）におこった遊女市の丞と客長右衛門の合意による同時的な共同自殺であるとされる。しかしなんといっても元禄

一六年（一七〇三）四月七日に発生したお初徳兵衛事件が、その直後の同年五月七日に『曽根崎心中』として初演されたことを契機に、未曾有の心中ブームを引き起こすこととなった。ここで取りあげた待難山の心中譚が『曽根崎心中』の成立より早い時期に掲載されていることは注目される。それは、心中の流行が遊女と客という限られた関係性の中でのみ、あるいは文芸作品のみによって広まったのではないことを示すひとつの事例であるからである。

三　地誌の中の待兼山

さきに触れた現地調査主義にもとづく学問的態度のあり方は、地誌の編纂において、より一層強められた。幕命により地理学者でもあった並河誠所らの実地調査に基づき、享保一九年（一七三四）に刊行された官撰地誌『五畿内志』(注21)下巻（『日本輿地通志』畿内部巻五五）、「摂津国之七　豊島郡」の項「山川」には、次のように記述される。ちなみにこの『五畿内志』は延喜式式内社の比定を積極的に行うものであった。

島熊山　熊野田村の北に在り（中略）待兼山　瀬川村の南に在り　玉坂山　玉坂村　○以上三山皆千里山の脉各古歌有り

また元文元年（一七三六）、五畿内志に刺激を受けて発行されたという南郷今西家第四三代玄章（春章）の手による『豊島郡誌』(注22)では、「山川陂地之五」に次のように記されている。

■待兼山　刀祢山村ノ北ナリ紀氏六帖ニ詠スル所ハ即此ナリ

□玉坂山　玉坂村ノ南ニアリ待兼山ト地脉同シ古詠アリ

また「古今文苑之十二」に

■待兼山　紀氏六帖ニ　津国ノ待兼山ノ呼子鳥鳴ド今コンイフ人モナシ

□玉坂并山　万代集ニ玉坂ト云ニ住渡リケルニ兵部卿ノ親王元良不通成ニケレバ言ツカハシケル

兵部卿親王元良　豊嶋ナル名ヲ玉坂ノタマサカニ思モ出ハ哀トイハナン

六百番歌合　顕昭　語ライシ我恋妻ヤ郭公玉坂山ニ声ノホノメク

ここで注目したいのは、地誌の編纂を通じた現地比定の徹底によって、場所の確定と実在しない地名の除外という作業が進められたことである。これらの地誌では、待兼山は瀬川村の南、刀祢山村の北という位置が明示される。玉坂山についても元良親王の通った玉坂村の南、待兼山と「地脉同シ」で、いずれも歌名所の地であると位置づけられた。もとより歌名所は歌に歌われる対象であり実際に訪れてみる対象ではなかったのであるが、こうした仮想の歌枕の地であった玉坂山が、現実の地名として待兼山の西の麓に存在する摂津国豊嶋郡玉坂村と結びつけられていく。そして、それまでは五月山や島上郡成合村の邂逅山など位置の比定が定まらなかった玉坂山が、地誌によって玉坂村に関連付けられたことは重要な変化である。この現地比定の解釈が『摂津名所図会』

へと継承されてゆくからである。そして地誌において『難波丸』が最初に提示した待難山・待難川などという、現実の地名として存在しない名所については、現地比定が困難であることから除外されていくこととなる。

四　『摂津名所図会』による創作

寛政八、一〇年（一七九六、九八）に刊行された『摂津名所図会』は、秋里籬島編、竹原春朝斎ら画（全体の半数の挿絵は春朝斎による）による全六巻からなる摂津国の名所案内記である。このほかにも『都名所図会』『大和名所図会』を手がけた籬島・春朝斎のコンビは、名所図会ブームの立役者として知られている。籬島は現地調査を踏まえて、各名所の伝承や由来を記録・体系化し、写生図を中心とした挿絵を添えて名所図会を編纂したといわれる(注23)。名所図会に描かれた数々の名所は、新たな意味を付与され、広く流布していくこととなった(注24)。

待兼山をめぐる地の紹介は、この『摂津名所図会』の「巻の六」に掲載されており、その内容は近代に至るまでの待兼山のイメージを決定づけるものであったと評価できる。まずは以下にその内容を示すこととするが、形式的な内容をみると、名所や旧蹟名、その場所の情報、それを示す和歌の作例を列挙し、図絵を付すという名所図会の様式が完成していることが確認される。

◇待兼川　玉坂村の東にあり。むかし玉坂里に容顔麗しき女ありけり。近隣の里より男恋ひ慕ひ、夜毎に山を越えて通ひ、わりなき仲となる。ある夜かの男疑ふ心ありて垣の外にしのんで佇みけるを、女しらず、待宵の時うつりぬるを悲しく思ひてかくなんよみける、

待ちくれてうつつに見えし面影の夢もつれなき山風の音

男みそかに聞きてなおも互ひの思ひふかく、人目も恥ぢずかよひければ、世の人の嘲りとなりぬ。これを二人ともうらめしく思ひて、つひに麓の川へ身を投げ空しくなる。今は川の名に昔を遺す

『夫木』夜もすがらたまりて積もる涙かなこやまちかねの山川の水　俊頼朝臣

□玉坂山　玉坂村にあり。また邂逅山あるいは適逢山とも書す。待兼川の故事を詠めり

『六百番』かたらひし我がこひつまや郭公たまさか山に声のほのめく　顕昭

『万代集』津の国玉坂といふ所に住みわたりければ、兵部卿親王元良通はずなりにければ云ひ遣わしける

豊島なるなほ玉坂のたまさかに思ひ出づれば哀れといはなん

■待兼山　玉坂村の東にあり

『新古』夜をかさねまちかね山の時鳥雲井のよそに一声ぞきく　周防内侍

『新後拾』明けるまで待かねやまのほととぎすけふもきかでや暮れんとすらん　藤原顕綱

『夫木』よもすがらまちかね山に啼く鹿はおぼろげにやは声を立つらん　俊頼

（中略）

千里山　（中略）待兼山・島熊山・邂逅山等みな千里山の山脈なり（後略）

〔丹波桃渓画　挿絵（図三）〕六帖　津の国の待兼山のよぶこ鳥なけど今来（いまく）といふ人もなし　よみ人しらず

ここにおいて『難波丸』『摂陽群談』からの変更点を幾つか指摘できる。まず場所の問題であるが、心中譚に由来していた地名「待難山」「待難川」は消え、「待兼川」「玉坂山」「待兼山」にまとめられている。待兼川は玉坂村の東（箕面川）に、玉坂山は玉坂村（「邂逅（かいこう）山紫雲院金龍寺」は「邂逅（たまさか）池」とともに別項。成合村山腹とする）に、待兼山はその東にそれぞれ比定されており、実際の豊島郡の地名に割当てられている。籬島が地誌などに掲載された各地の伝説や伝承を考証しつつ、現地調査をおこない名所図会を作成したことが、実在しない俗名所「待難山」「待難川」を除外する結果を生んだと考えられる。地誌との関連でみると、玉坂山の作例で『六百番歌合』『万代集』の和歌を挙げたのは『豊島郡誌』の内容を、千里山の項で「待兼山・島熊山・邂逅山等みな千里山の山脈なり」と位置づけたのは『五畿内志』の内容を、それぞれ踏襲したと考えられる。

しかし、最も注目すべき変化は、待兼山ではなく待兼川の項目から取りあげたという点であり、はじめに待兼川をめぐる逸話として、玉坂の女と近隣の男の心中譚を紹介していることである。その内容は先にみた『難波丸』の逸話と比べると、時代は「永和」の頃と明示されず、男は待難山に隠遁し山から下りてくるものから、待兼山を越えて女の元へ通う設定へと変更されている。さらに「男疑ふ心ありて」女を試すくだり、高貴な男から里の男へ、独娘から容顔麗しき女という変化も、心中に至る逸話をより通俗的なものにしている。そして続けて本来であれば名所待兼山を歌枕としているはずの「夜もすがらたまりて積もる涙かなこやまちかねの山川の水」を掲載する。この俊頼の古歌は心中譚とは関係ないはずであるが、待兼川への入水を連想させるような、「涙」や「山川の水」にかけた意図的な読み替えと考えたくなる。こうして待兼川を（歌）名所の地としたのである。この読み替えを経た結果、待兼山は、「待難山」における永和の逸話から切り離されることとなり、勅撰集に選ばれた旧知の和歌を掲載することで由緒ある歌名所として示しながら、悲恋の話も付加することに成功したといえる。

次ページの挿絵では、高貴な身分と思しき男が松の生い茂る夜の待兼山の山中を歩く姿を描き、さらに待兼山を詠んだ最も古い歌である『古今和歌六帖』の和歌が添えられている（図三参照）。下方中央には待兼川を表現したと思われる川の流れも描かれている。この挿絵において、入水による心中、公家（元良親王のイメージか）の風体の人物の存在、歌名所としての由緒などが結びあって示されており、言うなれば歌名所の伝統に基づきながら、異なる伝承を包含しつつ、あらたな待兼山イメージがここにおいて成立したといってよいのではないだろうか。

この「待難山」「待兼山」「玉坂山」をめぐる整理をめぐっては、その時代や場所の解釈からはいささか強引な印象を受ける。しか

し、編者らは古典の情報を価値あるものとして評価し、その編集作業によって生まれた情報が新しい価値を生むことを認識していたといえる。ここにおいて生み出された名所観は、その後の名所の分類に大きな影響を与えることとなった。例えば、その反映のひとつの事例を、天保七年（一八三六）の『新改正摂津国名所旧跡細見大絵図』（図四、口絵）にもみることができる。この図では、記号で「▲」を歌名所、「●」を俗名所に分類しており、待兼川、待兼山、玉坂山は、いずれも歌名所に分類されていることが確認される。

おわりに

ここまで簡単にではあるが、待兼山周辺の名所としてのあり方について、中世から近世までの変遷についてみてきた。平安中期に歌名所として成立した待兼山は、近世中期に至って、玉坂や待難山における悲恋のイメージを内包したものへと変化していったことが確認された。

では、こうした待兼山をめぐる名所観の変遷を繋ぐものは何なのであろうか。ここでは「移動」という視点から考えてみたい。初期の歌名所待兼山は、都を離れ豊島の地の山荘・別業へと移動した貴族らの存在と関わって成立した。ここでは特に場所を明らかにする必要がなかったのは当然である。それを大きく変えたのは、近世以降に登場し、地誌や名所案内を通じて普及した、現地調査主義ともいうべき学問的態度である。名所を考証するうえで、文献のみではなく現地に移動してそれを検証し、場所の比定を行うことが求められるようになった。この変化は明らかに地誌や名所案内記の内容に反映され、それがどの場所に存在しているのかという情報を必ず加えることとなったのはみてきた通りである。その結果、待兼山、待兼川、玉坂山は場所が比定されていくと同時に、待難山や待難川のような不確かな情報は除外されるということも起こった。

そうした編集作業を経て『摂津名所図会』の待兼山周辺の名所観には悲恋の逸話も付け加えられることとなるが、その情報は人々にどのように受け入れられていたのであろうか。そのひとつの理解として、当時、この待兼山の周囲を巡る可能性を高めたと考えられる西国三十三ヶ所巡りをとりあげたい。当時、寺社参詣は宗教的巡礼行為というよりはむしろ、楽しむべき庶民のレジャーとして存在していた(注25)。西国街道を通行する際、平野のなかの小高い待兼山は街道からも確認できたはずである。待兼山や玉坂山、待兼川をながめつつ、はるか昔の貴族達の悲恋を偲ぶ行為を楽しむという行動を、名所図会の表現が補助したのではないか。そう考えると、当時、入会山として利用されていた待兼山の実際の景観を描くよりも、古の貴人の姿とともにかつての待兼山の景色（と考えられた姿）を描いていることがよく理解される。

待兼山の名所観の変遷の画期は、当然のことながら、時代毎におけるその地への訪れ（移動）のあり方の変化に由来するということになる。例えばそれは、山荘・別業を訪れる貴族、現地調査を行う者、娯楽としての旅を楽しむ庶民であった。こうした貴族の山荘にはじまる名所観の変遷を追跡することができる場所はほかにも数多く存在していると考えられ、総論的に議論される傾向

の強かった近世の名所観の研究に個別事例を加えていくことで、より広がりのあるとらえ方が可能となるのではないかと考える。

注

（注1）朝倉治彦ほか編『日本名所風俗図会』一〇大阪の巻（角川書店、一九八〇年）所収を底本に使用。

（注2）入会山としての待兼山の利用については、鳴海邦匡・小林茂「変わる里山―北摂の絵図と地図にみる景観変化―」『大阪大学総合学術博物館年報二〇〇五』、二〇〇五年、及び鳴海邦匡・小林茂「近世以降の神社林の景観変化」『歴史地理学』四八巻一号、二〇〇六年を参照されたい。

（注3）青柳周一「近世の地域は名所図会にどう記録されたか―近江の名所図会と伝説おぼえがき」『国文学　解釈と鑑賞』八九三号（二〇〇五年一〇月）、井上智勝「近世大坂における名所の創出と伝説」（同前）、同「十八世紀大坂周辺村落における名所の出現と宣伝・普及」『大阪歴史博物館研究紀要』三、二〇〇四年など。

（注4）錦仁「中世文学と文化資源―和歌研究の見直しのために―」『国語と国文学』九二三号（二〇〇〇年一一月号）。

（注5）ここでは錦仁『浮遊する小野小町　人はなぜモノガタリを生みだすのか』（笠間書院、二〇〇一年）をはじめとする錦の一連の小町伝承研究を念頭に置いている。

（注6）徳田和夫・菊地仁・錦仁編『在地伝承の世界【東日本】』（三弥井書店、一九九九年）、岩瀬博・福田晃・渡邊昭五編『同【西日本】』（同、二〇〇〇年）及び、『国文学　解釈と鑑賞』六九巻一一号（二〇〇四年一一月）特集「古典文学に見る日本海」なかでも項目「伝説の移動と定着」所収の諸論考など。

（注7）渡辺実校注『枕草子』（岩波書店、一九九一年）を底本に使用。

（注8）上野理「枕草子「山は」考」早稲田大学平安朝文学研究会編『岡一男先生頌寿記念論集　平安朝文学研究　作家と作品』（有精堂出版株式会社、一九七一年）。

（注9）以上は荒木浩「文学の中の待兼山―その歴史など」大阪大学総合学術博物館編『マチカネワニ資料集』（二〇〇四年）を参照。

（注10）片桐洋一編著『元良親王集全注釈』（新典社、二〇〇六年）を底本に使用。

（注11）『摂陽郡談』（後述）などでは、「むかしかたらひし人の、年比ありて、津の国たまさかと云所にありけるを、ききつけて、まかりあひて、夕暮にす、むし鳴けれは、読る。忠見　邂逅にけふあひみれとす、むしは昔なからの声そ聞ゆる」と紹介している。ただし、橋本不美男編『宮内庁書陵部蔵御所本三十六人集　三五　忠見集』（新典社、一九七一年）では「むかしみし人にきいの国のたまさかといふところにてあひてす、むしの鳴来れば…」と、紀伊国の歌とされている。

（注12）『新版池田市史』概説篇、一九七一年、七五―七七頁。

（注13）『新定　源平盛衰記』第五巻（新人物往来社、一九九一年）を参照した。

（注14）上杉和央「一七世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」『地理学評論』七七巻九号、二〇〇四年、五九一頁。

（注15）上杉二〇〇四、五九一―五九四頁。

（注16）青柳二〇〇五、七二頁。

（注17）塩村耕編『古版大阪案内記集成　翻刻・校異　解説・索引篇』（和泉書院、一九九九年）を底本に使用。

（注18）こうした「玉坂山」と「待難山」の位置の比定は、近代になっても統一した見解を示すことはなかった。『大阪府史蹟名勝天然記念物』（一九三一年）は待兼山を桜井谷村字北刀根山の北とし、待難山を復活させて北豊島村に

あり「待兼山の続けるもの」であるとし『摂陽群談』の心中譚を引用している。さらに『大阪府全志』（一九二二年）で待兼山題歌に挙げられた契沖「こぬ人を待兼山の雫にもいはほとなりて我やぬれなん」を、待難山の心中譚に接合し、待兼山の悲恋イメージの強化をこころみている。

（注19）羽生紀子「京都・大坂出版メディアの動向―見林・益軒をめぐって―」『武庫川国文』五四号、一九九九年。

（注20）平野庸脩編『播磨鑑（全）摂陽群談（上）』（歴史図書社、一九六九年）を底本に使用。

（注21）日本古典全集刊行会『五畿内志』下巻（一九三〇年）を底本に使用。

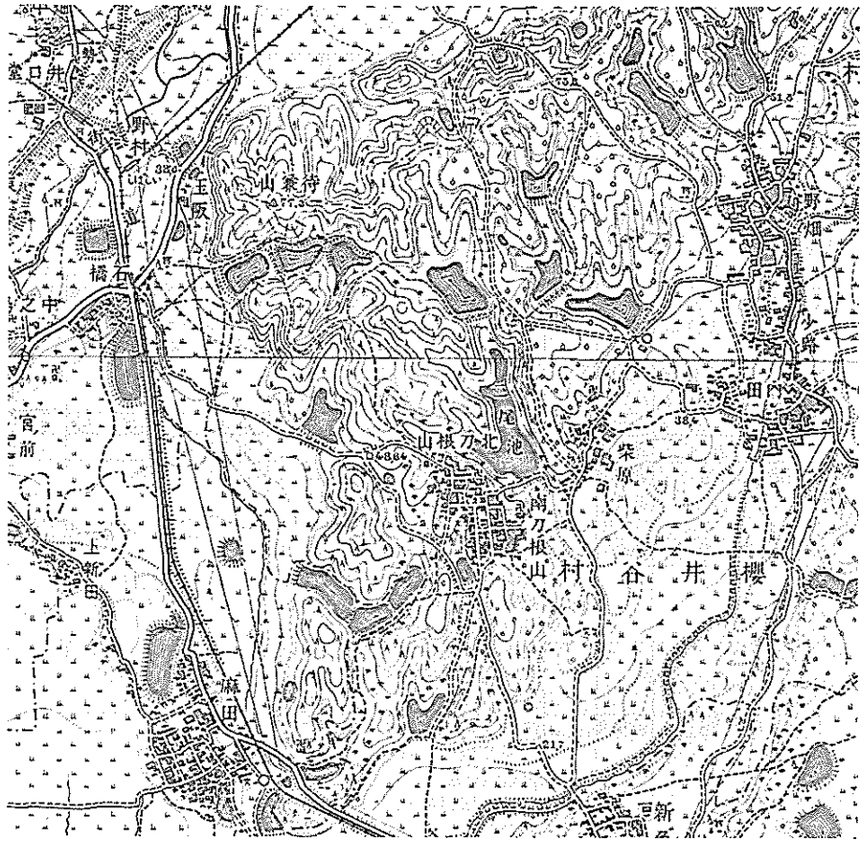
（注22）『豊中市史』資料編四、二二九―二四七頁。

（注23）『特別展　名所図会の世界』（名古屋市博物館、一九八八年）六頁。

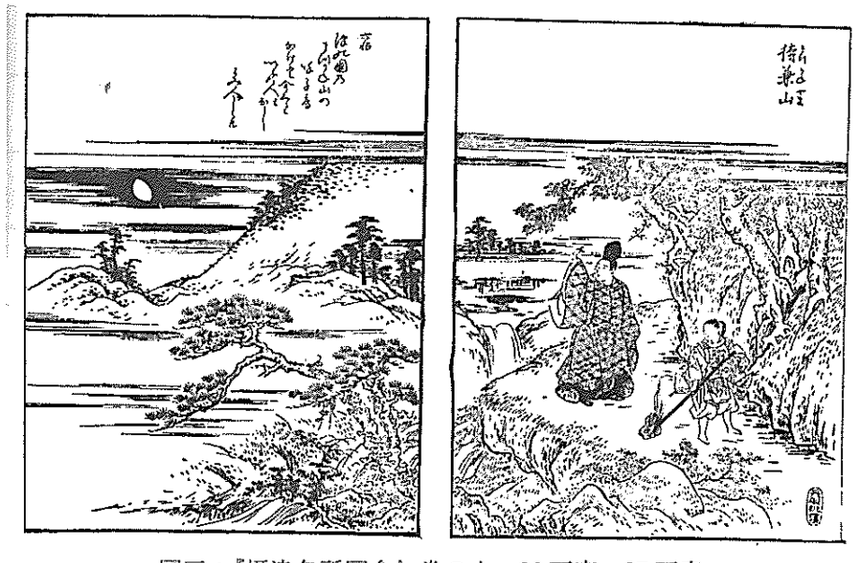
（注24）井上二〇〇五。

（注25）矢守一彦『古地図への旅』（朝日新聞社、一九九二年）、及び田中智彦論文集刊行会編『聖地を巡る人と道』（岩田書院、二〇〇四年）所収の諸論考を参照。

（ひろかわ　わか・大阪大学総合学術博物館助教）
（なるみ　くにただ・甲南大学文学部准教授
大阪大学総合学術博物館招聘准教授）



図二：近代の待兼山付近　正式二万分一地形図「伊丹」「池田」（部分）、明治 42 年（1909）測図　＊図の横幅の距離は約 2.5km。



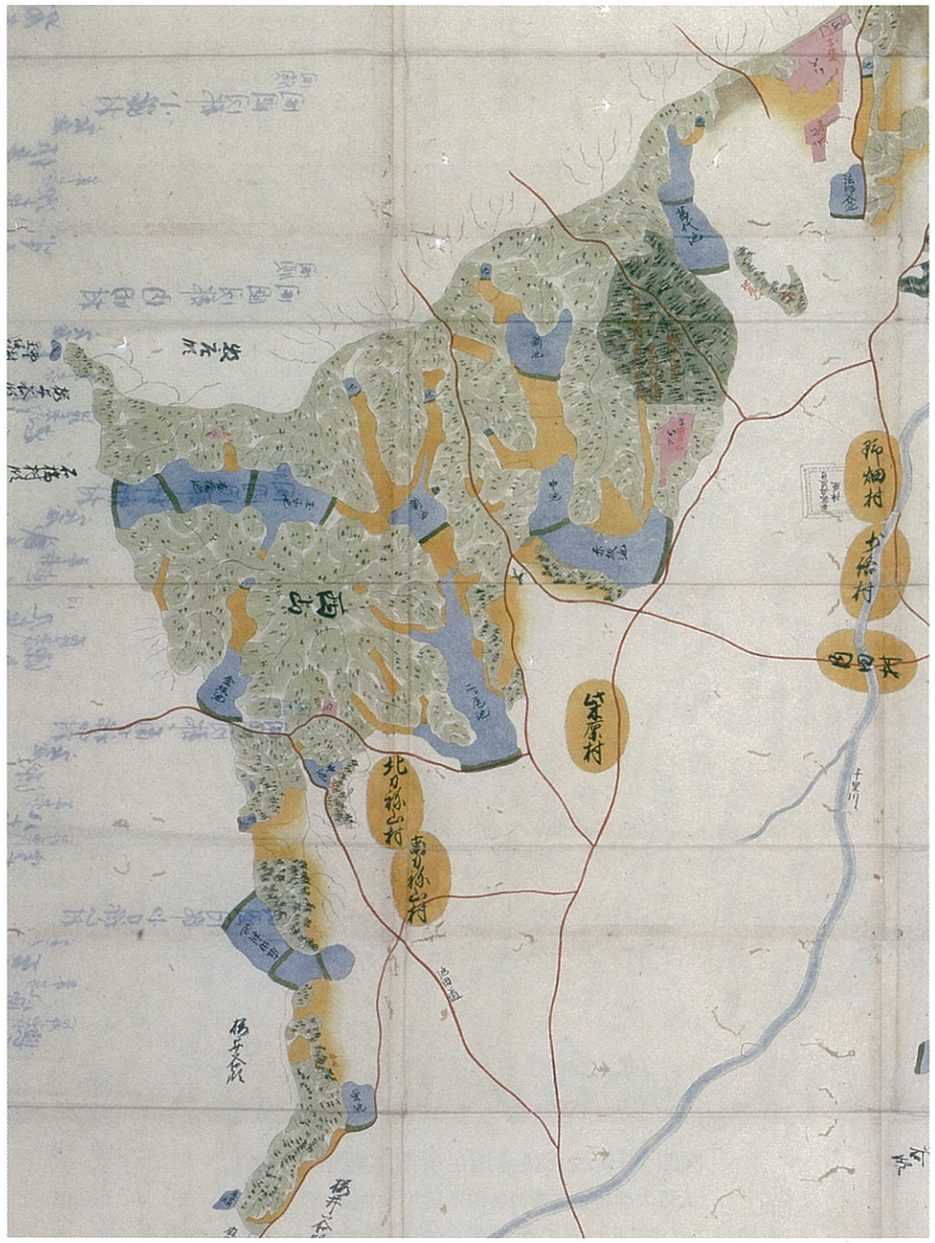
図三：『摂津名所図会』巻の六　26 丁裏・27 丁表

表　待兼山・玉坂（山）を詠んだ和歌等の一覧

年代	表題等	区分	待兼山	玉坂（山）
元良親王（890- 943 年）の死後しばらくして編纂	『元良親王集』	私撰集		「つのくにに、たまさかといふところに、しりおき給へる女「てしまなるななをたまさかのたまさかにおもひいでてもあはれといはなん」」→万代集へ
平安中期 ※村上天皇在位中か （946-96 年 7）	『忠見集』	私家集		「昔かたらひし人の、としころありて、つのくにたまさかといふところにありけるをききつけて、まかりあひて夕くれにすすむしなきけれはよめる、「たまさかにけふあひみれどすずむしはむかしならししこゑぞきこゆる」」
976-987 年頃	『古今和歌六帖（紀氏六帖）』	類題和歌集	「津の国の待兼山のよぶこ鳥なけど今来（いまく）といふ人もなし」	
1000 年頃	『枕草子』	随筆集	（本文省略）	（本文省略）
不明 ※能因（988-1058年頃？）	『能因歌枕』	歌学書	「国々の所々名」「摂津国」に「まちかね山」	同「たまさか山」
1094 年	高陽院七番歌合	歌合	周防内侍「夜をかさねまちかね山の時鳥雲井のよそに一声ぞきく」→新古今へ 藤原顕綱「明くるまで待ちかね山の時鳥けふもきかでやくれんとすらむ」→新後拾遺へ	
1105-06 年	『堀川百首』	私撰集	俊頼「よもすがらまちかね山に啼く鹿はおほろげにやは声を立つらん」 太皇太后宮肥後「こぬ人をまちかね山のよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞきく」	
1121 年	内蔵頭長実家歌合	歌合		忠隆「時鳥幾夜な夜なをまたせつつ玉さか山に鳴き渡るらん」→夫木集へ
1128 年？	『散木奇歌集』	私家集	俊頼朝臣「夜もすがらたまりて積もる涙かなこやまちかねの山川の水」→夫木集へ	
1150 年	『久安百首』	私撰集	実清「さをしかのつまにこよひやあはさらむまちかねやまのかひになくらむ」	
1151 年	『詞花集』	勅撰集	太皇太后宮肥後「こぬ人をまちかね山のよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞきく」	
1166 年	『中宮亮重家朝臣家歌合』	歌合	顕昭「ほととぎす待兼枝山の一声は聞くにつけても怨めしきかな」→夫木集へ	
1186 年	文治二年歌合	歌合	「つまこひてまちかね山に立つ鹿は夜すがらねをぞなきあかしつる」	
1190 年	『俊成五社百首』	私撰集	「たのめおきつまやこさらむさをしかのまちかねやまのあかつきのこえ」	
1194 年	『六百番歌合』	歌合	顕昭「かたらひし我がこひつまや郭公（ほととぎす）たまさか山に声のほのめく」	

1200 年	『三百六十番歌合』	歌合		「ほととぎすつれやたつぬるかひならむたまさかやまのよはのひとこえ」
1201-10 年頃	『新古今和歌集』	勅撰集	周防内侍「夜をかさねまちかね山の時鳥雲井のよそに一声ぞきく」	
1201 年	『鳥羽殿影供歌合』	歌合	「ほととぎすまちかね山の明け方に　うらみはつれば来鳴く一声」 「ふくるまでまちかね山のほととぎすねぬ夜のかひも有明の月」	
1230 年頃？	『拾玉集』	私撰集	慈鎮「今はただ空たのめにもこりねとや待兼山の峰のしひ柴」	慈円「あひみてもまだまつほどのひさしきはたまさかやまに鳴くほととぎす」 慈鎮「あひ見てもまた待つほどの久しきに玉坂山になく時鳥」
1248 年	『万代集』	私撰集		「津の国玉坂といふ所に住みわたりければ、兵部卿親王元良通はずなりにければ云ひ遣わしける 「豊島なるなほ玉坂のたまさかに思ひ出づれば哀れといはなん」（詠み人しらず）」
1256 年	『百首歌合』	歌合	「はるはるとまちかねやまはすきぬれとなほおとつれぬほととぎすかな」	
1303 年頃	『歌枕名寄』	類題和歌集		「いかにせんおのがさ月を待ちきてもなほ遐逅の山時鳥」
1310 年	『夫木集』	私撰集	俊頼朝臣「夜もすがらたまりて積もる涙かなこやまちかねの山川の水」 後鳥羽天皇「来ぬ人を待兼山のほととぎすかたぶく月のかげになくなり」 顕昭「ほととぎす待兼枝山の一声は聞くにつけても怨めしきかな」 忠通「しらしかしさよふくるまでつのくにのまちかねやまはいまそこえゆく」	忠隆「時鳥幾夜な夜なをまたせつつ玉さか山に鳴き渡るらん」
1384 年	『新後拾遺和歌集』	勅撰集	藤原顕綱「明けるまで待かねやまのほととぎすけふもきかでや暮れんとすらん」	
1434 年	『永享百首』	私撰集	「おのかつままちかねやまのあきかぜにふくるよさむのしかやなくらむ」	
1439 年	『新続古今集』	勅撰集	「たのめつつ君がこぬ夜の衣手やまちかね山のしづくなるらん」	
1787 年	『漫吟集』	私家集	契沖「こぬ人を待兼山の雫にもいはほとなりて我やぬれなん」	

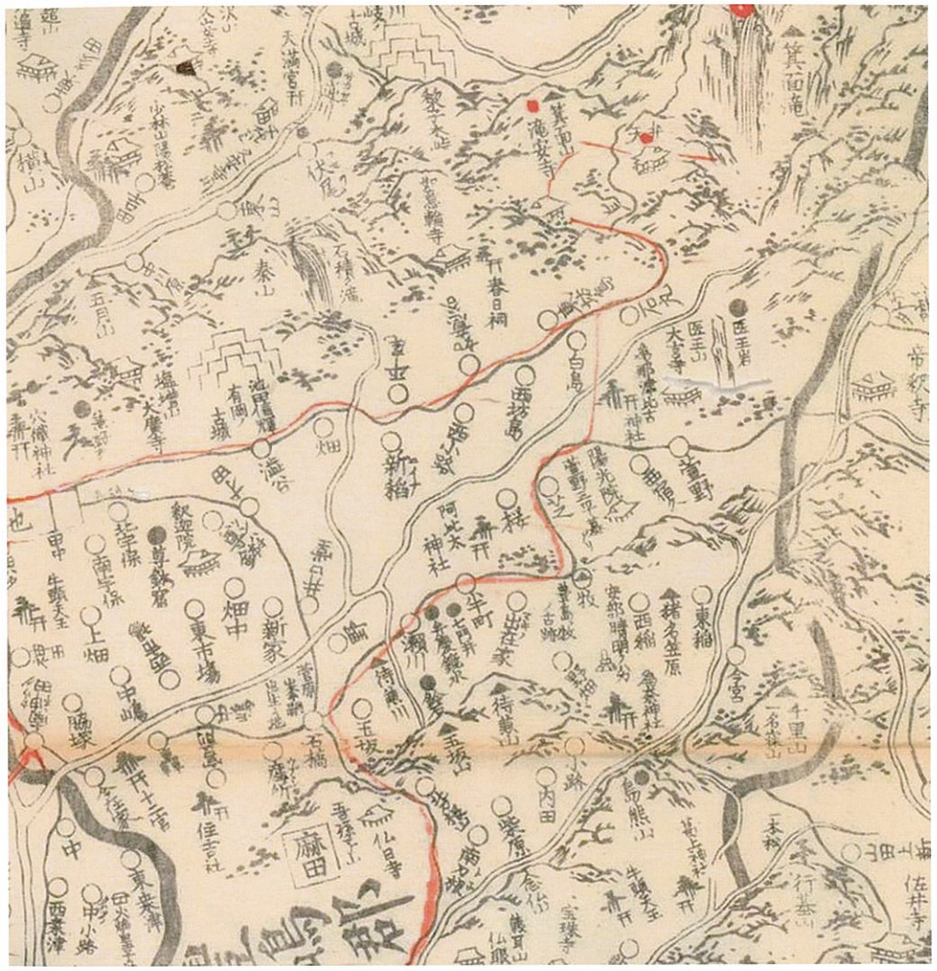
作成は井上正雄『大阪府全志』（発行：前田勝雄 1922 年、復刻：清文堂 1975 年）、大阪府学務部『大阪府史蹟名勝天然記念物』第 2 冊（発行：前田勝雄 1931 年、復刻：清文堂 1974 年）、岩田忠三郎編集発行・大阪府豊能郡北豊島村役場『北豊島郡誌』（1935 年）、松井重太郎編著『桜井谷郷土誌』前編上（1931 年、復刻：豊中市教育研究会「豊中の歴史」部会　代表三谷博、1985 年）等のほか、国際日本文化研究センターホームページ「和歌データベース」（http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/waka.html）に拠った。なお「たまさか（山）」については、地名を意識して表現されたものを挙げた。



図一：近世中期の待兼山を描いた絵図
『摂津国豊嶋郡柴原村小路村内田村野畑村南刀祢山村北刀祢山村御小物成場絵図』（部分）
内田村中川家文書（豊中市立岡町図書館架蔵）明和３年（1766）８月
本図で待兼山は「西山」と記されている（「東山」は島熊山）。
（本誌、廣川和花・鳴海邦匡稿参照）

前号目次

平間長雅『奉納千首和歌』について……福田安典
平間長雅の箱伝受と『堺浦天満宮法楽百首和歌』……箕田将樹
蔵山集解題補考―撰集の基盤について―……浅田　徹
『文反古』の版下筆者……飯倉洋一
享和元年の秋成……辻村尚子
読本の東西往来―文化期の事例を中心に……木越俊介
万治二年板『道中記』の異版―訂補……永野　仁
漢文体小説『小説温泉奇遇』解説補遺……服部　仁
連載　上方文藝研究の現在（5）　読洒会



図四：『新改正摂津国名所旧跡細見大絵図』
（大阪大学総合学術博物館所蔵）天保７年（1836）
赤線はこの絵図の元の所有者の旅程を書き込んだものか。
（本誌、廣川・鳴海稿参照）

忍頂寺文庫蔵〔逸題加賀掾段物集〕について

―段物集研究の試みとして―

川端咲子

はじめに

近世の浄瑠璃研究において浄瑠璃の段物集というものは、その序文跋文に太夫たちの芸論が記されていることがあることから太夫論の材料として使われてきた(注1)。あるいは段物集所収曲から、浄瑠璃の上演年の下限を決める有効な材料としても使われてきた。また段物集は、正本が現存しない浄瑠璃の存在を示唆するものでもある。しかし、個々の段物集について、それを一作品として考察対象とすることはあまりない。また、従来のように浄瑠璃史研究の材料として使うにしても、まだまだ有用な利用法があることと思われる(注2)。そこで本稿は、段物集研究の可能性を模索するままに、段物集を数多く残した宇治加賀掾の逸題段物集を一作品として取り上げてみる。本題に入る前に、加賀掾の段物集について少し述べる。

一、加賀掾の段物集について

宇治加賀掾の段物集は、戦災で焼失したもの、『門弟教訓』（元禄十年刊）の序文に書かれていながらこれまでその存在が確認できていないものも含めて、その数は二十を超え、形式も成立事情も段物集ごとに様々である。「段物集」として全てを一括りにして取り扱うことは妥当ではない。こうした加賀掾の段物集に対しては、それぞれの段物集一作ごとに性格や他本との関連を考察していくことが必要であろう。その際には、まずは段物集全体をなんらかの視点で分類した上で、考察することも有意義かと思われる。分類については、例えば段物集の制作事情を視点にしての分類や、段物集の成立事情を視点にしての分類などが可能と思われる。書肆も山本九兵衛が大部分を占めるとはいえ、複数に渡ることから書肆による分類もできよう。